The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

高麗版大蔵経と蔵経道場

馬　場　久　幸

1．はじめに

高麗は遼や蒙古に侵略される等，常に周辺諸国に翻弄されてきた．こうした情勢下で，高麗は仏教を国教とし，仏力によって国を守ろうとしていた．その代表的なものが顕宗と高宗時代に行われた2回の大蔵経雕造事業であるが，それ以外にも様々な法会・道場が開催されていた．代表的なものに燃燈会や八関斎会などがあり，それ以外にも『仁王経』，『金光明経』，『法華経』などの護国経典を中心とした法会･道場も数多く開催され，その総回数は1000回以上にも及んでいる[1]．このことからも仏教を国教として信仰し，国難を仏力で乗り越えようとしていたことがわかる．

さて，高麗時代に数多く行われていた法会・道場の中に蔵経道場と呼ばれるものがある．蔵経道場とは，その名称から大蔵経と密接な関係にあることが窺える．先にも述べたように，高麗時代は大蔵経が2回も雕造された．特に，高宗時代の大蔵経の雕造事業は蒙古軍の退散を祈願したように，それ自体が護国思想に由来している．そこで，本稿では，蔵経道場がどのような道場で，高麗版大蔵経とどのような関係があるのかについて考察する．

2．高麗時代の法会・道場

高麗時代には数多くの法会・道場が開催された．その回数を見てみると燃燈会が157回で最も多い．次いで消災道場が147回，仁王道場が121回，八関斎会が115回の順となる．その他，救命道場をはじめとして1回しか行われなかったものも24種ある．その中で『仁王経』，『金光明経』，『法華経』などの護国経典を中心とする法会・道場は，講経元来の意味を持つ講説よりも祈祷目的の儀式的な性格が強く，全ての災難から国家を鎮護し，国民を保護するという護国的な本質を持っていた．特に，蒙古軍の侵略に遭った高宗時代には，最も多くの仁王道場

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

が開催された．仁王道場は，『仁王経』を所依経典としており，戦争，内乱，疾病，風雨などから国家を鎮護し，国民を保護しようとする目的で開催された道場である．『仁王経』「護国二諦品第四」には，

> 大王．此経名為二仁王問般若波羅蜜経一．汝等受二持般若波羅蜜経一．是経復有二無量功徳一．名為二護国土功徳一．亦名二一切国王法薬一服行無レ不二大用一護二舎宅一功徳．亦護二一切衆生身一．即此般若波羅蜜．是護国土．如二城塹牆壁刀剣鉾楯一．汝応レ受二持般若波羅蜜一．亦復如レ是[2)]

とあり，般若波羅蜜を受持することによって国が守られると説かれている．仁王道場開催の本質は般若波羅蜜であり，その宣揚の実践にあった．

高麗は，当時処されていた状況を打開するために，仏菩薩の願力と功徳によって外敵の侵略から国家及び国民を守ろうとする信仰的，政治的な意図から，仏教の護国性を国家的に受容，発展させていた．

3．蔵経道場

『仁王経』，『金光明経』，『法華経』などの護国経典を中心とする法会・道場の他に，大蔵経を信仰の対象とした蔵経道場と呼ばれるものがある．『高麗史』によると，この蔵経道場が宮中で盛大に行われていたという．

『高麗史』顕宗20年（1029）条に，「蔵経道場を会慶殿で設け，毬庭で僧侶1万人にご馳走を施した」[3)]とある．これが『高麗史』に見る蔵経道場に関する最初の記録で，当時会慶殿で僧侶1万人余りが動員された大規模な道場だったことがわかる．しかし，この記録のみでは，当時開催された蔵経道場の背景及び過程に関する詳細な内容までを把握することはできない．ただ，周知の通り，初雕大蔵経が雕造された時期が，顕宗の在位晩年であるという点を勘案した時，この記事が伝える蔵経道場は，初雕大蔵経と関連した行事であったと推測される[4)]．次に開催されたのは13年後の靖宗7年(1041)であり，この時に蔵経道場が1年に2回，春には6日間，秋には7日間と規定されるようになった[5)]．宣宗8年（1091）には，王が行香して詩を書き，仏教に帰依する姿勢を示す[6)]など，国家行事として大規模に行われるようになったと考えられる．『高麗史』にはその後も，粛宗代に2回，睿宗代に1回，仁宗代に1回など，蔵経道場がたびたび開催されていたことが伝えられている．この期間中に行われた蔵経道場の内容については，前述した靖宗代及び宣宗代に比べ，特に目立った記録がない．ところが，忠宣王の時代に至っては，蔵経道場の期間が通例では春が6日間，秋は7日間であったものが，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

春と秋にそれぞれ10日間ずつ開催されるようになるなど[7]，若干の変化を見せるようになる．

蔵経道場について，より具体的にその性格と目的を伝えている資料がある．『東文選』巻110にある鄭知常の「転大蔵経道場疏」と「転大蔵経道場疏　又」には，

> 特為社稷霊長，人民殷富，謹准前規於闕内会慶殿，自今月某日起始，約幾日夜開設精厳道場，供養本師釈迦文佛為首一会聖賢，兼請名師転読大蔵経殊勝功徳者（中略）陰陽順而京坻積，戎狄和而金革銷，燕及蒼生，同霑利沢[8]

> 特為宗社底安，邦家永泰，祇率旧草於天成殿，以今月十日之夕起首，約六昼夜開啓転大蔵経道場，備厳科儀，供養教主釈迦如来為首一会賢聖，以乞来成之福者[9]

とある．上の資料では，大蔵経を転読する道場が宮中の会慶殿で数日間に渡って行われたとあり，下の資料では，天成殿で6日間昼夜に渡って行われたとある．蔵経道場が会慶殿で行なわれていたことは，前述の通り『高麗史』からも窺える．また，仁宗10年（1132）4月の蔵経道場が天成殿で開催された[10]ことから，2つの資料が蔵経道場のことを示していることがわかる．では，蔵経道場とは一体どのようなものなのか．これらを見るとどれもが大蔵経を転読している．即ち，昼夜問わず6日間それを転読し，国の平和や五穀豊穣などを祈願するものであったことがわかる．

金坵の「宣慶殿行大蔵経道場音讃詩」には，「一つの法宝が100万の軍事よりも優れ，魔軍と外道もみな恐れおののき狙い撃つことができない[11]」とある．即ち，蔵経道場を開催することで国が守られるということであり，それほど大蔵経に対する信仰が篤かったことがわかる．こうした点から，蔵経道場は個人的な信仰の次元というよりも，国家規模の護国信仰的な性格を帯びていたことが窺える．

4．高麗版大蔵経と蔵経道場の関係

では，蔵経道場が高麗時代に雕造された大蔵経と具体的にどのような関係があったのか．徐閏吉氏は，「蔵経道場は大蔵経を板刻，書写，雕造して，その事業を祈念したり，その功徳を讃嘆したり，またはその経を広く流布・信仰させるために開設されたものであった[12]」として，高麗版大蔵経と関連があると述べている．

しかし，このような見解に対し，筆者は大きな枠の中ではある程度肯けるが，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

高麗時代に開催された蔵経道場が大蔵経の板刻等を祈念し，その功徳を讃嘆するために行われたものであると断言するには無理があると考える．その理由を述べる前に，高麗時代に行われた蔵経道場の開設年度と回数を注視する必要がある．

〈表〉高麗時代の蔵経道場開設年度と回数[13)]

王名	年度	回数
顕宗	20年4月	1
靖宗	7年4月	1
宣宗	8年8月，10年4月	2
粛宗	6年3月，7年9月	2
叡宗	13年9月	1
仁宗	10年4月	1
毅宗	10年10月	1
明宗	8年9月，11年6月，13年2月，15年3月，15年9月	5
高宗	3年3月	1
元宗	11年9月	1
忠烈王	1年3月，2年3月，2年9月，6年3月，12年3月，25年1月，31年4月	7
忠宣王	3年3月	1
忠穆王	3年9月	1

〈表〉からも確認できるように，顕宗20年（1029）にはじめて開催された蔵経道場は，忠穆王3年（1347）に至るまで合計25回に及んでいる．その中でも忠烈王の時代には7回も開催されていたことがわかる．この時代は，金・銀を用いた大蔵経書写が盛んに行われていた．当時は白紙に墨で書いたものよりも，金・銀を使う方がより大きな功徳を積むと考えられていた．忠烈王は王女と共に金字大蔵院で僧侶たちを供養して激励したり[14)]，金字大蔵経の写成を慶祝したりもしていた[15)]．大蔵経の書写が外敵の侵入と内乱を仏法で鎮圧し，国を守るという鎮護国家思想に基づいた国家的な事業として行われていた．

一方，高麗版大蔵経と蔵経道場との関係を探ってみると，初雕大蔵経との関連性が多少なりともあったように推測できるが，再雕大蔵経とは関連性がないと言わざるを得ない．なぜなら，再雕大蔵経が板刻された高宗時代には蔵経道場が1回しか開催されていないからである．しかも，それは再雕大蔵経が完成するずっと以前のことであり，完成当時（高宗38年（1251））に蔵経道場が開催されたという記録は見られない．また，再雕大蔵経は忠粛王3年（1316），辛禑6年（1380），辛禑7年（1381）の3度印刷されているが，その時に蔵経道場が開催されたという記録もやはり見られない．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

5．おわりに

以上，高麗版大蔵経と蔵経道場について考察してきた．蔵経道場については，どのような経緯で開催されるようになったかなど，今後も引き続き詳細な研究が必要とされるが，それは大蔵経を転経する儀式であり，国の平和や五穀豊穣を祈願するなど国家次元の護国信仰的な性格を帯びたものであった．

また，従来蔵経道場が大蔵経の雕造と関連しているという見解があった．今回，蔵経道場が最も多く開催された忠烈王の時代を例として，大蔵経と蔵経道場との関連について考察した．蔵経道場と大蔵経書写の背景には，国家の危機を仏力で乗り越えようとする意図があったと考えられる．しかし，高麗史上，最大の危機に処されていた高宗の時代に大蔵経（再雕大蔵経）が雕造されたが，当時蔵経道場が開催されたという記録は見られない．また，再雕大蔵経の完成後，それが何度か印刷されたが，その時にも蔵経道場が開催されたという記録は見られなかった．以上のことから再雕大蔵経の雕造及び印刷と蔵経道場が直接的な関連があったとは言い難い．高麗時代の蔵経道場は，広い意味で大蔵経と関連があったことは間違いないが，それが必ずしも高麗版大蔵経の雕造及び印刷と結びつき，それを祈念するために実施されたものではなかった．

1）徐閏吉「高麗의 護国法会와 道場」（『仏教学報』14，東国大学校仏教文化研究所，1977年，p.110）　2）『仁王般若波羅蜜経』「護国品」，『大正蔵』8，p.829c　3）『高麗史』巻5顕宗20年4月庚子条　4）鄭駿謨『高麗仏典目録研究』（亜細亜文化社，1990年，p.19）　5）『高麗史』巻6定宗7年4月癸巳条　6）『高麗史』巻10宣宗8年8月甲子条　7）『高麗史』巻34忠宣王3年3月癸卯条　8）鄭知常「転大蔵経道場疏」，『東文選』巻110　9）鄭知常「転大蔵経道場疏　又」，『東文選』巻110　10）『高麗史』巻16仁宗10年4月壬申条　11）『東文選』巻14　12）徐閏吉前掲書，p.110　13）この表は，徐閏吉前掲書（pp.91-102）を参考にして蔵経道場部分のみを抜粋し，一部を筆者が加筆して作成したものである．　14）『高麗史』巻29忠烈王9年9月己未条　15）『高麗史』巻30忠列王15年閏月乙酉条

〈キーワード〉　高麗時代，法会，道場，高麗版大蔵経，蔵経道場

（佛教大学総合研究所嘱託研究員）

NII-Electronic Library Service